

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370807

研究課題名(和文)生命統計の応用にみる近代衛生行政の日英比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Modern Sanitation System: Mainly by Focusing on the Difference between Japan and Britain in the Policy about the Application of the Vital Statistics

研究代表者

尾崎 耕司 (Ozaki, Koji)

大手前大学・総合文化学部・教授

研究者番号：10309396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：生命統計は、19世紀西洋で発達し、社会保険制度や社会政策の確立に影響を与えたものである。この研究は、まず英国においてこの生命統計を発達させたウィリアム・ファアの理論と実践を検討し、またその英国における現状とおなじく生命統計を導入した日本の事例とを比較する。この検討を通して、本研究は公衆衛生の視点から各国国民国家の特性の相違を明らかにするものである。与えられた4年の研究期間の間に、本研究はウィリアム・ファア文書を調査しその複写物を持ち帰った。また本研究の成果として、「明治『医制』再考」(『大手前大学論集』第16号、2016年)などの論文を発表した。

研究成果の概要(英文)：The vital statistics were developed in the nineteenth century in the Western countries and affected the establishment of the social insurance system and the social policy. This study first examines the theory and practice of William Farr who developed such statistics in Britain, and then compares the actual conditions of them in Britain with those in Japan to which the same statistics was adopted. Through the examination, this study elucidates the difference in the characteristics of the nation state from the viewpoint of the public health. During the term of four years that this study was given, I have investigated the William Farr papers and collected the duplications of the documents. I have also published some articles concerning the administration system of public health, including 'A Reconsideration of the Medical Act of 1874' (Otemae Journal, 16, 2016).

研究分野：日本史

キーワード：日本史 公衆衛生 日英関係 19世紀

1. 研究開始当初の背景

研究代表者(尾崎)の問題関心は、行政というものの存在から、日本近代社会の歴史を再検討するというところにあり、特にこれを医療や衛生に焦点を当てて研究を進めている。医療や衛生は、それを行政として見た場合、国が往々にして国民個人に直接権力を行使する領域である。また、それは前近代にあっては「養生」と言い表され、自助に属するものとして公的な行政とは本来馴染まないものであったから、「医療行政」「衛生行政」が成立するためには養生のような社会通念の変更までも含めた前近代社会の仕組みの改変が求められた。さらに他方では、西洋医学の受容や感染症のパンデミックなど、かかる領域はつねにグローバルな物事の展開に影響を受けた。

このように、医療や衛生に着目することにより、国の内外からインパクトをうけて国民国家が自らの権力行使のあり方をどのように構築するかを検討することが可能になる。

近年、かかる領域についてグローバルな視点から研究が進められている。たとえば、オクスフォードのマーク・ハリソンは、19 - 20世紀にかけての経済のグローバル化がいかにして感染症の世界的流行を引き起こしたのか、世界各地の史資料を渉猟して明らかにした(Mark Harrison, *Contagion: How Commerce Has Spread Disease*, Yale University Press, 2013)。ハリソンの研究から研究代表者(尾崎)は影響を受けている。しかし、こうした研究も次の点の解明が未だなされていない。すなわち、ハリソンらの研究は、経済(貿易)と感染症の流行という、いずれもグローバルな動きを直接つないで分析してしまい、感染症への対策などそれぞれの国民国家がローカルにおこなう権力行使の分析がやや手薄となったきらいがある。各国民国家が前近代社会のもつ問題点(前述の「養生」の通念など)をいかに克服したのか、またその前史の克服の過程でそれぞれの国家がどのような固有の権力装置を持つようになったのかが分からないのである。総じて、グローバル化が進むことで逆にナショナルな特性が強まるのではないかという点を、従来の研究は上手くその視野に入れることが出来なかったといえる。

研究代表者(尾崎)はこれまで、まずコレラやペスト等の感染症の流行が国内において前近代的な仕組みの改変を迫り独特な行政機構を構築するに至ったことを明らかにしてきた。たとえば、「1879年コレラと地方衛生政策の転換 - 愛知県を事例として - 」(日本史研究会『日本史研究』第418号、1997年6月)では、1879(明治12)年のコレラ流行を事例に、自助努力で患者を看護しようとするイエの観念を克服すべく、いかにして地方レベルで衛生行政の仕組みが作られていったのかを検討し、また、「衛生組合に関する考察 - 神戸市の場合を事例とし

て - 」(大手前大学『人文科学部論集』第6号、2006年3月)では、1899年のペストの流行が、汚物掃除などを家主に課す近世以来の公役賦課の残滓とみられる構造が転換されることを明らかにした。

次に、科学研究費補助金(基盤研究(C):研究課題番号18520524、「後藤新平にみる西洋公衆衛生思想の受容」、2006 - 2009年度)による助成を受けて、西洋から移入される医学や衛生に関する学知が日本で行政組織を立ち上げる上でいかなる影響を及ぼしたのかを検討した。その成果は、「エドウィン・チャドウィックの救貧法および公衆衛生思想に関する一考察: その労働者と家族のイメージに着目して」(大手前大学『大手前大学論集』第12号、2012年)および、「西欧の公衆衛生制度をわが国は移植できたのか」(医学書院『公衆衛生』2014年1月号掲載予定)などの形で発表した。その中では、たとえば「西欧の公衆衛生制度をわが国は移植できたのか」など、イギリスでウィリアム・ファー(William Farr)らによって19世紀中葉以降に発展をみた生命統計(Vital Statistics)の考え方が、特に労働による所得をもって人の「生涯の価値」を換算しそれをもって感染症などが与えるリスクを数値化するという発想を日本の衛生家に与え、「養生」のような通念に対して国の計算可能な行財政をもって衛生に備えることが正当化できるようになったこと。しかし他方で、生産年齢人口の所得が社会を支えるという発想が強まり、衛生を経済成長による国民総所得の増大と不可分に結びつけ、今日のような少子高齢化に直面する社会にとってはひとつのアポリアを生み出したこと等を展望した。

本研究で研究代表者(尾崎)が進めようとした研究は、この後者の延長線上にある。すなわち、上記の研究で概括した生命統計の持つ意味について、おなじく生命統計を応用して衛生のための行政組織を立ち上げるにしても、すでに資本主義が発達した19世紀後半のイギリスといまだ封建社会の残滓が色濃く残る同時期の日本とではその内容は大きく違ってくるはずであり、その違いを分析することで、それぞれの国民国家の特性を明らかにすることができるはずである。特に、衛生の分野のなかでも生命統計の考え方を視座に据えることは、感染症等の問題にとどまらず、労働者の健康保険制度など、ドイツほかこの当時各国で議論の俎上に登ってくる社会(福祉)政策のあり方の違いへと、一歩踏み込んで展望を与えてくれるものと思われる。これが本研究の眼目である。

2. 研究の目的

本研究では、衛生という分野のうち、後の健康保険制度など社会政策とも深く関わる生命統計という領域を取り上げ、これが開発さ

れたイギリスにおけるその具体的な行政組織への応用のあり方と、同じ考え方を受容した日本の場合とを比較することで、それぞれの近代国民国家がもつ特性の違いを明らかにしたい。研究を進めるに当たっては、London School of Economics & Political Science (以下、LSE)を訪れ、その付属図書館に所蔵されている生命統計の開発者ウィリアム・ファアの文書を閲覧、これを複写して持ち帰り、その内容を詳細に分析することを中心的な作業として執り行う。

3. 研究の方法

上記の研究テーマをもとに、本研究では、その期間内でイギリスにおける生命統計の発展とその具体的な行政組織への応用を分析し、これを同じ考え方を受容した日本の場合と比較することに務めたい。具体的には、ウィリアム・ファアを対象にイギリス側の史料調査とその分析を中心に進める。

ファアについては、エイリアーの伝記的研究 (John M. Eyler, *Victorian social medicine: the ideas and methods of William Farr*, Johns Hopkins Univ., 1979) や、ファアの報告書集が公刊され日本でも容易に入手できる。しかし、LSEには、“Manuscript correspondence, and manuscript and printed papers of William Farr: with biographical and bibliographical material”と題して、ファアの膨大な手稿が保存されているが、これはいまだデジタル化されておらず、したがって現地を訪れないと閲覧が不可能である。これを見ずに生命統計とイギリス社会の現状を関連づけて研究を深めることは出来ない。そこで、LSEのファアの文書、さらにはファアと親交の深かったナイチンゲールやエドウィン・チャドウィックの文書(それぞれロンドンの Wellcome Library および University College London Library 所蔵)を現地において調査し、彼の生命統計とその行政への応用の具体像に迫りたい。

前掲「エドウィン・チャドウィックの救貧法および公衆衛生思想に関する一考察」では、ファアに先行して救貧や公衆衛生の確立に尽力したチャドウィックをとりあげ、彼であっても、「良き旧き英国労働者 (the good old English labourer)」の自助という意識がその構想を規定しており、衛生をかかると自助意識から解放することが容易ではなかったことを明らかにした。公的な行政をもってではなく民間の共済組合が運営する生命保険をもって労働者保護を補完するという発想にチャドウィックはたどり着いたのであり、これは中央集権的な日本のあり方と大いに異なる部分である。このように、日本が封建社会の残滓と向き合って衛生行政を立ち上げる19世紀後半は、早期に産業革命を成し遂げたイギリスでは、その産業革命によってもたらされた通念に向き合っ

なければならない時期でもあったのである。本研究は、おなじく生命統計を応用して衛生行政を立ち上げる両国を比較することで、より一層彼我の違いが明確になると考える。生命統計のような、それ自体は科学技術の成果でいずれの国にも適用が可能なものでも、それを具体的に応用しようとするれば、それぞれの社会の仕組みや通念との対話なくしては進まない。本研究は、この学知の応用の問題から、総じてグローバル化にともなって逆に顕在化する国民国家のナショナルな特性を見出さうものとするものである。

4. 研究成果

研究期間の4年間をかけて、イギリスにおける史料調査をおこない、LSE 付属図書館でのウィリアム・ファア文書の閲覧等をおこなった。本史料の収集と解析が本研究の核であったが、ただし、研究開始当初の2年間は同図書館におけるその利用が予想以上に複雑であり調査は当初の目論見より難航した。これに対して2016年度から、同図書館におけるマイクロ史料の閲覧が格段に利用しやすくなり、画像データを自前のUSBに保存し持ち帰ることが可能となった。2017年度は、この作業をようやく完了し、同史料を全冊複写のうえで持ち帰った。これは、マイクロフィルム4巻、合計2000コマにもおよぶ相当大部な史料である。そのため、その内容の分析を本研究の当初計画年度内に完了することは残念ながらできなかった。研究期間は2017年度で終了するが引き続き作業を進めていきたい。

次に、本研究期間の間に論文の発表、および海外での学会発表を精力的に進めた。

まず論文については、2016年3月発刊の大手前大学論集16号に、「明治『医制』再考」とのタイトルで研究論文を発表した。これは、1874年(明治7)制定の医制をとりあげ、その立案者や内容の特徴について検討するものである。分析の結果本稿では、医制が、従来言われてきたような相良知安が原案を作成し長与専齋がこれを引き継いで制定されたようなものではなく、相良知安とその麾下の第一大学区医学校のメンバーが原案から成案の作成に至るまで一貫してその立案を主導したこと、その背景には、同医学校の専門学校化と上野山移転、および東京の司薬場を中心に売薬税導入を含めた薬剤取締を実施する同校メンバーの意図が込められていたことが明らかになった。また、そのような意図を込めて立案されたがゆえに、医制は、特に東京以外の地方では適応しづらいものとなっており、これに反発した田中不二麿や長与専齋が左院とともに相良らを文部省から排除し、75年の医制改正に至ることも同時に解明した。

翌2017年度には、同じく大手前大学論集17号に“Sensai Nagayo: Pioneer of Hygienic Modernity or Heir to Legacies

from the Premodern Era?” を発表した。これは、前年の「明治『医制』再考」での考察に引き続いて、長与専斎の衛生や医療、薬事に関する考えを検討したものである。ここでは、長与が伝統的な薬種商がもつ薬の流通や品質管理の能力に依りながら、輸入薬の統制をすすめ独立した薬事制度の設立に成功してゆく過程を明らかにした。

海外における学会発表としては、第1に、2014年7月10～12日に開催された Society for the Social History of Medicine 2014 Conference: Disease, Health, and the State (St Anne's College, Oxford) に出席し、“Western Hygiene and Eastern Thought: Mainly on Ideas of a Japanese Sanitarian” の題目で発表をおこなった。これは、日本近代の衛生家としても知られる後藤新平をとりあげ、彼の衛生思想における西洋(ドイツ)と東洋双方の社会思想の影響を論じたものであり、公衆衛生のようなグローバルに普及する技術や知識が、その運用に当たっては国民国家の枠組みに強く規制されることを問う本研究の問題意識に沿ったものである。

第2に、2015年度には同年4月30日～5月3日にかけて開催された American Association for the History of Medicine の2015年度年次総会 (New Haven, US) において、“Why was the opium smuggled by John Hartley seized for ten years?: Examining the 1870s Anglo-Japanese dispute over drug control” の題目で研究発表をおこなった。これは、1877年末英国人商人 John Hartley によって引き起こされたアヘン密輸事件について検討したもので、幕末に結ばれた条約の下、領事裁判によって下された判決に異議を唱えた日本政府が、判決そのものを翻すには至らなかったものの、国際法理論の変化や英国外務省と日本政府とのいわゆる「砲艦外交」にかわる新たな関係性の構築のなかで、以後日本独自のアヘン取締法制を確立していくことに成功することを明らかにした。

第3に、2016年9月30日から10月1日にかけて開催された、The Eighth Meeting of the Asian Society for the History of Medicine: Conference on Medicine and Modernity in Asia (Academia Sinica, Taipei, Taiwan) において、“Sensai Nagayo and the Japanese Cholera Epidemic of 1877” の題目で研究発表をおこなった。この内容は、前記の通り “Sensai Nagayo: Pioneer of Hygienic Modernity or Heir to Legacies from the Premodern Era?” として加筆修正の上大手前大学論集 17号誌上に掲載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

尾崎耕司 “Sensai Nagayo: Pioneer of Hygienic Modernity or Heir to Legacies from the Premodern Era?” 単著、大手前大学論集、査読無し、17号、2017、61-88

尾崎耕司、「明治『医制』再考」、単著、大手前大学論集、査読無し、16号、2016、15-53

[学会発表](計 3件)

尾崎耕司 “Sensai Nagayo and the Japanese Cholera Epidemic of 1877” 単独発表、招待無し、The Eighth Meeting of the Asian Society for the History of Medicine: Conference on Medicine and Modernity in Asia、2016年10月1日、Academia Sinica, Taipei, Taiwan

尾崎耕司、“Why was the opium smuggled by John Hartley seized for ten years?: Examining the 1870s Anglo-Japanese dispute over drug control” 単独発表、招待無し、2015 meeting of American Association for the History of Medicine、2015年5月2日、New Haven

尾崎耕司、“Western Hygiene and Eastern Thought: Mainly on Ideas of a Japanese Sanitarian” 単独発表、招待無し、Society for the Social History of Medicine 2014 Conference: Disease, Health, and the State、2014年7月12日、St Anne's College, Oxford, UK

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

尾崎 耕司 (OZAKI, Koji)
大手前大学・総合文化学部・教授
研究者番号：10309396

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()